

あとを  
ひ心中 卯月の潤色

作者 近松門衛左門

上卷 末期の道行

此上卷の文句は  
卯月紅葉に出て  
たれば註を省く

江戸節今捨る身にも恐ろし犬の聲、辻を隔てよ見返れば、あれで生れし町所、家の馴染も十五年、其春夏の此月は、忌月とて物忌ひ、しの字をさへも嫌ひしが、死して死骸を知る人に、其死恥も包ましく、其方の鬚亂れずや。いや我よりもおの様の、鬚撫附けて搔きなでて、死んだ跡迄よい殿と、人に言はせまほし明り、今宵の月を月々に、待ちしも遂に引きかへて、冥途の使我々を、待つらん物と搔きくれて、泪曇りの十七夜、二人が袖に宿しけり。よしや地獄へ墮つる共、假令佛に成とても、必ず契り米屋町、本町の軒深く、思ひ染みたる中なれば、埋まば同じ安土町、生れ變りて又いつか、娑婆の便の備後町、思へば我も元服し、私も若いに鐵漿つけて、のがれし賽の河原町、三途の瀬戸の淡路町、超れば親の古里の、名にも別ると平野町、曙近き時太鼓、どうく修町これや

この、修羅の太鼓の響かと、共に驚く袖と袖、抱き寄せつゝ泣く計、聞ば私も母様の、三十過ぎての初子とや。其譲りかや刷初めて、一夜離れた事もなく、交す枕に子胤のないか。是も産ますの數ならば、根を掘る竹の伏見町、高麗橋の西東、床も定めぬ立君は、これも世渡る習ひとて、浮世小路の細き聲、唄ふてかへる其歌の、品有中にも來ぬ人を、まつほの浦の夕風に、やくや藻汐の身を焦がす。夫は吾妻の物語、耳に聞きたる計ぞや。和女と我は浪速津の、貴賤群集の見るめかる、尼ヶ崎町くはしよ町に、はや北濱や中の島、明日は天満の橋々賣りて、梅田の梅田の堤をそめし、紅葉笠屋のな女夫の心中、男廿一お龜は十五、年にあはすりや、悪戯々々じや。サア繪双紙ゑ、餘所の口の端ア餘所ごとに、買求めては慰みし、此身の果を讀賣に、誰が節つけて田舎迄、唄ひ流さん蜷川水も濁りて此世へは、いつ歸りすむ根なし草、ゆんでは無常の燒草と、惜からぬ身はおしからず。蟲「灰となさふか此肌」興「煙と成か此の形」興「惜や」興「いとしゃ」二人「悲や」と、引合し手を猶締めて、涙の限り泣きつくす、杜の小烏川千鳥、合法鳥も聲さびて、早東雲も近付ば、小田守る賤に忍ばんと、右へ下れば網舟の、目にやかよらん行く先は、早會根崎の宮奴の、朝淨する折なれば、今は詮方夏草の、人目堤の下蔭を、爰ぞ夫婦が最

期場と、泣々息らひ立ちにけり。お龜は夫の顔を見て、「連立つ冥途の道とは知れど、今生の別れとて、云ひたい事の何やらが、胸には有て口へ出ず、あく程顔が見て死たや、心なの短夜」と身を投かけて泣るたり。與、ア、愚や愚痴や淺ましや。永き來世が有ぞかし。去ながら心に懸るは其方の父御、二人共無き獨子を、憎や掣めが殺せし、とさこそ恨み憎しみの、是罪障となるぞ」とて、共にひれ伏し泣きければ、龜「いや父様は男氣の、思ひ諦め有べきが、愛しや在所のお袋様、姑なりとて一日の、給仕へしたこともなく、大事の子をば嫁ゆへに、失ふた殺したとお叱りなされんこれ一つ、目の不自由な伯母様の、力と成はこち女夫、さぞ今比は泣悲み、眼でも眩ぬかどうしたと、胸に塞がる是二つ、又母様の十三年、觀音經を書ませふ、佛になつて下さんせと、墓に向ふて約束の、是が違ふた何やかや、斯迄重き罪科の、閻魔の前には黒鐵の、帳に付と聞ものを、能い所へよも往かじ。火水の地獄も厭はね共、夫婦別れて行ふかと、是のみ猶も迷ひぞ」と、聲もおします歎きけり。さすが男は力をつけ、「一つに行ふと別れふと、皆一心の向け様ぞ。氷の地獄火炎の地獄、劍の山へ登る共、取交したる手は放さじ」と、心強くは云ひけれど、まだ蒼む花出る月、玉の様な若い者、若い女の顔はなさ、なだめらるよ

もなだむるも、分たぬ涙なり。與「あれ早東も白ふだり。サア念佛」と云ひければ、  
龜「心得たり」と懐より髮剃二挺取出し、「これも母様の額たれとて譲りなり、私はこ  
れで死たい」と泣くく出す其の中に、向ふの野道を入通ふ。「あれよく」と心は急く  
二挺の髮剃一つにとり、「南無阿彌陀佛」と引寄せれば、お龜は常々信仰の「南無觀世音  
菩薩様、母様の戒名教譽授給信女、一つ蓮に導き給へ。南無觀音様觀音様」と、手を合せ  
待ちけれ共、男は目眩れ差うつぶき、只泣くより外の事ぞなき。龜エ、憂目を見せて  
何事」と、夫の手を取我が咽喉に、押當れば思ひきり、與「南無阿彌陀佛」と笛のくさり、  
髮剃の刃も折れよと、一剃は割りしが、若き者の悲さは、とどめの灸所を知らずして、  
未だ息絶へず悶ゆるを、疵の口を隠さんと、抱の帯をくるくくと、二三遍引廻す、憂目  
の程ぞ不便なる。與「我もやがて追付ん」と、咽喉にあつる髮剃の、刃は鋸と折砕け、皮  
肉ばかり切れけるを、力を入れて突きけれ共、通りつべうはなかりけり。「南無三寶」と  
髮剃すて、傍に拔置脇指の、鞘を持って引き上る。鐔は重し手は弱る、はづんではぬる勢  
ひに、脇指ぬけて樋の口の、井出の水草の漲つて、さんぶとこそは沈んだれ。與「エ、し  
なしたりこは如何に」と、這下る堤の露、翻れし血に足たり、池へどうと落ちたりける、

なから死—半死  
半生

三十五日—お龜  
の死後の日敷

池は深くて泥深し。底の脇指尋ねかね、浮きぬ沈みぬ漂ひしが、今を最後の眼にも、夫を思ふお龜が心、引揚げんとや思ひけん、はふく岸によると見へしが、眩む眼に氣も亂れ、同じく池へどうど落ち、互に助け引揚げんと、抱き上ればどうど伏し、かき上げばかつぱと伏し、心計を力にて、龜なふ與兵衛様く、「與お龜く」と呼交す。絶へ絶へ切る息の下、この世からなる地獄かや、哀れはかなき三重有様なり。朝出の土民が見つけ出し、「ヤレ心中」と呼ばはる聲に、里人おり合ひ、池に飛び入引上れば、女は死して眞薦草、菰や席に死骸を埋む。男は淺疵ながら死、「殺してくれ、死なしてくれ」と、泣叫ぶ間に縁者一門駆付く、北久太郎町心齋橋古道具屋の跡取智養子、と取々に、見物人の山をなす。「斯てはすまず」と與兵衛を駕籠に打乗せ、ながらへし甲斐も有かや蜷川、跡白波とぞ成にける。

### 中之卷

廣がりし、浮名は何とすほめても、笠屋夫婦の心中と、歌に謠はれ繪に賣られ、或は狂言淨瑠璃の、三十五日に早なりぬ。父長兵衛は一人子を、敢なくなせし其悔み、聲與兵

びらり帽子—紫  
縮緬の帽子

肩がいかる—肩  
身が廣く

さぞ—嘸あらん  
と也  
おく—裏と置

精靈—飼佛

十二銅—十二文  
の養錢、乗穂録

衛が疵も又、立賣堀の伯母諸共に、傳三兄弟引連れて、河内の親の手に預け、天王寺の東門を、大坂の方へ歸りしが、下女のふりは神子町を、見遣りてわつと泣き出し、ふり申伯母御様おるま女郎、今迄は物見見物物参り、又は此よな時節でもお龜様も打揃ひ、びら帽子に加賀菅笠、大振袖の後帯、どんな者でも見返りて、お供に付た私等迄、ほんに肩がいかつたに、大事の花を失ふて物足らずなお供には、歩けど足を引戻す。何時やら爰の神子町へ、夫がお供の仕納か。冥途の道の一人旅、誰がお供しませふぞ。おふり何如じや斯じやと愛想らしい聲付が、耳に残つて有様な。元結一筋紙一枚、買はずに囃ふて遣ふたもの。お龜様に別れてから、五分で買ふた塵紙を、涙に拭ひ上げた」とて、口説立てぞ歎きける。伯母も「涙の乾かぬに又云ひ出して泣かしやるか。實に何時ぞや口寄に、此神子町へ來たと聞く、それも斯なる約束かや。最期の時は親伯母に、云ひ残したい事もさぞ、問ふて取らせんいざ去らば」と、冥途の闇の黒格子、辻がもとへぞ立寄りける。神子の内には心得て、茶を持つて出る煙草盆、文庫の蓋に梓弓、おくより神子も立出て、「御祈禱か口寄か。お心ざしの精靈は、目上か目下か、古い佛か新佛か。神降致してはお十二銅が一包、御さき祓百二十、お望み次第」と云ひければ、「ア、く

に僧尼が施す錢  
十二文とあり

百二十一廿廿文

さらしな一曝す  
にかけて姨捨山  
の歌を引きたり  
名月一姪にかく

茅屋の雨一降つ  
ても知れぬ故に  
いふ  
廻され一自由に  
される

禮錢はどふなりとも。三十五日の新精靈、荒血の上で死したる人、能ふ寄らつしやれ寄り給へ」と、各數珠に手を掛けて聽聞すること哀なれ。千早振る御さき祓の道淨め、天清淨とは水火の淨め、地清淨とは家内の淨め、内外六根清淨とは世に亡き魂の道しるべ、六道四生の淨めぞかし。忝くは座せど、神と佛は夜と晝、娑婆と冥土は日光月光、出るも入も同じ道。娑婆往來八千度、釋迦の子神子が梓弓、此弦音に寄來たは、梅田に屍さらしなや、伯母様の手向ありがたや。懐しの父御前、合の枕の與兵衛様、忘れがたなき古は、生口寄せた我なれど、今死口に寄り人が、語りたいぞや問はれたやなふ」伯母「梅田に屍さらしなとは、我名月の面影よなふ。姪一人伯母一人、何とて我に知らせもせず、不慮の死をめさつたる。目の見へぬ我なれば、おば捨山か恨めしや」山の枯木の一本立、母なき身には伯母様を、天とも地とも頼め共、ふちの木柱茅屋の雨、人こそ知らね屋の内に、直で立たる人はなし。先へござつた母様の、第三年も立ぬ間に、出船は遠く入船の、親ふ成は世の習、烏帽子寶の親仁様、内のるまめに廻されて、こちと女夫は雨夜の星、何所に有やら無いやらで、死なねばならぬ内の様、語れば親の懺悔なり。下された緋縮緬、形見になれとの端縫か。我名は昔の下紐も、與兵衛様はおいと

比翼連理—夫婦  
仲善き事—長恨  
歌—  
大鎌云々—心の  
曲—ためま兄弟  
を罵る詞  
面々—いかい—我  
々の心中は言は  
ば各自の自殺と  
も言ふべく  
酔て云々—嘔み  
こなす様にいた  
める  
いひたいがい—  
いひたいまくに  
はたへ死—あく  
たれ

しや、六尺だけに存生て、二度の死をなされふか、二度憂死なされふかと、是が迷となるはいなふ」伯ヲ、伯母が歎もそれ一つ。心中の作法にて、死損なひし片々は、試物になると聞。與兵衛が疵を養生し、本復したる其後に、試物になるならば、伯母は何とならふぞや。和女も伯母が可愛くば、片時も早ふ一道に、取殺してはなせたもらぬぞ」龜「いやなふ世間の心中と、夫れは違ひがあら金の、金銀づくの勤の身、奉公人や主人人、娘子などの添はれぬ中、狼狽死なぬ心中は、人殺同前の、罪に沈むも世の作法、幼稚馴染のこち女夫、比翼連理の中はよし、何に不足は無けれども、家では誰が點を打大鎌の犬めらに、懲果て死ぬる身を、云はど面々じかいとも、心中の外的心中ぞや。町衆在所世間へも、此歎きを云ひ分けて、與兵衛様の命を助け、道心出家させまして、朝晩回向が受けたやな。あそこに躑躅ふ兄弟の、犬どもを追出して下さらば、千僧萬僧百萬僧の、とひ用ひにもます鏡、冥土の曇が晴らしたやなふ」いま「いや是なふお龜様、女夫の衆が此るまを、酢でさいて飲む様に、いひたいがい云籠めて、死でもまだ云ひ足らぬか。榮耀が餘つて此方衆がほたへ死めさるよを、己兄弟が知つたか。それに何じや、兄弟の犬めらとは、ヲ、私や犬じや黒犬じや。試者になる與兵衛の、身體をがりくく



たらす一欺く

とばす一色に耽

提燈に釣鐘と一  
費賤の差甚だし  
き諺此下に「い  
ふ如く」の四字  
を入れて見るべ  
し  
くずいを一層に  
かく

輕薄一輕卒の言

さだつ云々一家  
内の風波を見抜  
いた  
獨み類一慾張者  
せこめ廻す一慮  
待する

と嚙でやろ。梅田堤で和女の死骸、嚙まいで残り多ひわいなふ」（鳥）なふ死人に妄語はな  
きぞとよ、恩を知らぬは犬畜生、身の皮剥いでも母様の、御恩を思はど幡天蓋、袈裟の  
一重も上はせず、著衣裳までもが取り取、家一杯に荒鼠、父御をたらす見苦や。それに  
おごり、弟の傳三めが、旦那増にとほし立、提燈に釣鐘と、主ある我が袖褻引き、與兵衛殿を失  
ひて、夫婦に成て家の跡、繼ふと云ふたを忘れたか。こちと夫婦は下人にて、るま兄弟  
は旦那顔、車は海へ舟は山、皆逆の憂さ辛さ。語れば親の恥晒し、云へば詞のくずいを  
の、夜の衣の我夫の、命を助け出家となし、家を晦ます黒雲を祓はど晴る胸の月、守の  
神のゆふつけ鳥の、別は又の逢瀬あり。今は返らぬ三途の川、影は留らず手に取れず。  
冥土の使繁ければ、浮世の名残是迄」と、梓の弓のうらはづに弦走して失にけり。伯母  
は涙に沈みながら、神子の前とも思はれず、伯是長兵衛の邪見者、亡者の寄口聞やつた  
か。我は其方の姉じやぞや。身こそ貧なれ一文一錢、合力は受まいし、何輕薄がいひた  
かる。現在弟に殿様付、内外の者に追従するも、母のない姪子共、可愛がらせふ爲はつ  
かり。月に一度しいて二度、三度とは往かね共、家のさだつも見て取た、此摺み類兄弟  
が、お龜女夫を踏付に、せこめ廻すと云ふ事を、盲目でさへ知て居る。其方に二ツ眼は

思ひ返る―思ひ  
代へる

つらいつれな  
い

公事みや―訴訟  
事  
きよはな―氣弱  
な

無いか、但知つての指圖か。お龜は其方が死した、お龜を返しや姪返しや。如何に妾が可愛とて、我子に思ひ返るとは、酷いぞやつらいぞや」と、喘上く泣き叫び、傍なる竹杖追取て、「姪の敵」と長兵衛を、散々にこそ打たりけれ。傳三も今も繩り付、「是申伯母御様、人中と云ひ女中の身、如何に弟御なればとて、近比非道千萬」ともぎ放す、手を振解き、伯、ヤア非道とは誰が事、其非道と云ふは己等兄弟、同じ女子と生れても、己等とは違ふたぞ、善悪は噛分ける。エ、扱此伯母が手前、兎も角もするならば、お龜夫婦を引取て、分立て商ひさせ、公事みやしても己等に、がやく口を利かせふか。貧の病に肩身もすほり、可愛やきよはな甥姪を、踏付にさせたよなあ。切て片眼見ゆるなら、起居素振に氣を付ても、斯闇々とは死せまじ。其胸慾な心からは、二人が死に出る躰を見ても見ぬ顔仕兼まい。恨しの者共や」と、盲目打になぐり打く、聲も惜まず泣きけるが、伯、不便やお龜が存生に、己等が奢る面敷きたからふ打ちたかる。若い身なれば齒ざしみして、堪へた心思ひやる。是はお龜が打杖」と折るよ計に四ツ五ツ、又ちやうくと打ち付て「今は打ても擲いても、死んだお龜が歸るにこそ。由なき罪を作りし」と、杖をからりと投捨て、前後不覺に伏沈み、聲を計に歎きしは、道理責めて哀なり。至極

傳三―出ぬにか  
落居―落着

剃こぼし―朝り  
あしす  
去此不遠―極樂  
は目の前にあり  
阿彌陀佛去此  
不遠(觀無量壽  
經)  
盤々―入り廻る  
十萬億土―極樂  
の遠き事、過十  
萬億佛土有世  
界名曰極樂  
(阿彌陀經)

に詰り一言も、傳三兄弟顔を下、ふしめになれば長兵衛も、漸涙を押し止め、具道理とも  
尤共、皆某が誤なり。此上は身に替て與兵衛が命を助け出家させ、娘が願ひを立申。落  
居の後にはるま兄弟、家を追出し申べし。外聞と云ひ親の身で、のめく生て居る心、伯  
母御推量遊ばせ」と、又さめく泣ければ、伯ヲ、夫はせめても其詞、違はぬ様に頼  
むぞや。ハ、神子殿へも面目なや。いつぞや爰へ生口寄せに參つたけな。美しい娘こそ今  
大坂の口の端に、かよる梓も縁ならめ。拜んで下され頼みます」と、出れば神子も門送  
り、「いとほ様や」と諸共に、思ひの数も百廿、袖に涙を包錢、繋がる因果や巡り行く、  
月にも日にも秋風と、捨て果てたりし與兵衛が、生甲斐も無き身なれ共、親伯母の心黙  
止されず、髮剃こぼし發心遂げ、妻の菩提も我後世も、助け給へと云ふ文字、其名を助  
給法師と改め、二度難波の古郷へは、踏返さじと足曳の、大和の國平郡谷、大念佛派の  
庵室に、しるべを求め閉籠り、妻の位牌の手向草、幽々たる谷に下りては、去此不遠の水  
を荷ひ、盤々たる山路に薪を拾ひては、十萬億土の月をよち、霜に憧れ霞に伏し、櫻が  
閉ざす柴の戸も、躑躅にあけて今年も早、卯月中旬に成にけり。相住の道心は、二三日  
以前より、石山參りの留主なれば、助給一人佛前に、心も細き鐘の聲、廬山の雨の世捨

廣の雨―白樂  
天の住居に寄  
せたり、盧山草  
堂夜雨獨宿（白  
氏久集）  
たう綱―投綱、  
戀に引かざる、  
事  
卯の花雪―白き  
投袖姿のお龜

とはん―ぼんや  
り

わさく―俚言  
集覽に清字を宛

人、捨ても捨てぬ面影は、夢共なく現共、無き人爰に有々と、昔を見るも歸るさ知らぬ、死出の旅く、露の仇駕籠急がん。戀といふ其たう綱にからまれて、浮みもやらぬお龜とは、外には人も水くらき、澤邊の螢稻のとの、影かあらねか簾の隙に、漏るは卯の花白妙の雪のな、振袖ちらくとな、ありし昔に奈良團扇、風かるくと駕籠昇が、昨日の旦那今朝の幻、夢の浮橋一ツ橋、甲「跨けじや」乙「合點じや」甲「跨けじや」乙「合點じや」手にも取られぬ臙駕籠、姿の山に肩替る、賤が袂も幽なる。折節助給は念佛に氣を屈し、茫然と眠げざし、物に化されたる如く、うつかりとして表を見れば、山家に見馴ぬ女中駕籠、不思議と思ふ氣も付ず。身をも所も打忘れ、とはんとしてぞ居たりける。細谷川の小石原、息杖の音かまびすく、川瀬が鳴るか空耳か、女の聲にて高々と、「北久太郎町古道具屋、笠屋與兵衛様と申お方は、此邊では御座らぬか」と、尋る聲と諸共に、駕籠は庵に近付たり。助給は元より魂魄に、氣を奪はれたる夢心地、與テ、是々其與兵衛は爰じや爰じや」と、扇を上げて打招く。乙「ヤレく嬉や彼處じやけな。駕籠の衆頼みます、まちつと急いで下さんせ」と、機嫌よけなる高笑ひ。程なく駕籠は庵室の、柴の戸口に昇据ゆる。簾を上げれば妻のお龜、にこやかなる緑の眉、芙蓉の日本わさくと、乙「さつて

つ、ナニヤカに也

かりる云々下つてある處を捲上げて降りると駕は失せた藜の羹―不味な精進もの

も熱い事かな。それそこな櫛の葉の水、一つ下さんせ」と、汗押拭ふと見へにける。やいや水はいらぬもの、釜の下を焚付ふ。して先今日は駕に乗つて何處へ往きやつた事ぞ」と云へば、鳥「さればいな、今日は四月十七日觀音様の御縁日、此方様と父様と、中の能ふなる願立に、二十二社廻り仕まして、其次手に神子町の、黒格子お辻の方へ、在所の衆が呼ばしやんして、一寸逢ひに寄りました。去年此方様の生口を寄せてから、近付になり初めて、再々私を呼出して、父様にも伯母様にも、折々は逢ひまする。神子殿さへ合點なれば、何時逢ふと儘なるに、なぜ此方様も折々は、呼出しては下さんせぬ」と、そごろに咽ふ恨みの涙、世に亡き人と氣も付ぬ、夫の心ぞ哀なる。鳥「ム、先駕籠は預からふ。爰へ通りや」と呼びければ、鳥「嬉や誰もなさそふな」と、裾を搔取身も軽く、おりるの簾捲き返す、駕籠は亂れて失にけり。助給内に案内し、「是見や今は此身持。結構な事はなけれ共、浮世の世話を餘所に見て、藜の羹かみぶすま、先盗人の恐れなく、寢覺が能ひ」と云ひければ、お龜は庵の躰を見て、「ア、ほんに扱も氣樂な住居じや。釜一ツ鍋一ツ、谷から水を汲んで来て、山から柴を折つて来て、米ごしくと洗ふて粗板に白瓜菜刀取て、てきくくくヤてきくくくヤ、てきくくしやんと揉瓜に、なれく

秋茄子―秋茄子  
嫁に食はずなの  
謔を利かせたり

二ほん―日本

口が上る―大層  
口が上手になつ  
た

振―娘姿

詰―年増姿

白―白人

風呂―湯女

初昔―三月の季

より廿一日目に

搦む茶(安齋隨

茄子秋茄子、嫁を譏る姑はなし、相伴は如來様火吹竹は一本、火箸は二ほん國中に、惚  
いと思ふるまめは居ず、此方様と只二人、寢たけりや宵から長枕、寢ともなくば起通し、  
誰が叱らふ共思はゞこそ、世界の樂とは此住家。女夫一所に居る内に、切て一日片時で  
も、斯した暮はしもせいで、今是が何になる。何ほ此住居でも、女房がなふては、ちつ  
と事が缺けませふ。鍋蓋と女房は無ふて叶はぬ筈なれど、鍋蓋あつても女房が無い。事  
の缺けぬは不思議じやまで。ほんに忘れた其筈じや、道具と女房は有合、尤じやく。  
道具屋の娘じやもの」と、とんと背けて、身をすねて口舌仕掛くる目元なり。色氣を離  
れた道心も、何様やら心浮いて來て、助「ヤアいかふ口が上つたの。斯して居ても面白い  
事芥子程も持ちませぬ。うさんな事が有ならば、拷問なされ」と云ひければ、其  
口が憎いはいの。此方覺へがござらぬか、立賣堀の伯母様の、聞ばあの與兵衛は、家の  
茶が飲み足らぬか、茶屋へもちよこく遣ふと有。其詞を覺へてか、夫から尋る折もな  
く、今迄胸に溜つて居る。穿鑿せふばかりに今日は遙々來ました。茶屋で此方のまい  
る茶は、新造の振かつめ茶か、但は白の白茶か、風呂で焚いた煎じ茶か。私が様な薄茶  
は交した詞も醒切て、水臭ふて呑まれまい。互にこひ茶の初昔、私は忘れは仕ませぬ」と、

（雲）  
こうにも云々  
役にも立たぬ

ありとは見えて  
「關原や伏屋に  
生ふる榊木のあ  
りとは見えて逢  
はぬ君かもの歌  
をとる

まざくあり

わかはり一來月  
がも龜の一周忌  
に當る

衣の袖にひつたりと、抱き付てぞ泣きにける。助給打ち笑ひ、「エ、こうにも立ぬ格氣じやなふ。今は左様の色茶もなく、只お茶湯で暮します。去ば釜を焚付て、お茶湯一服供へませふ」と、火打箱引寄せて、はたくと打ければ、お龜すつくと立上り、「なふ熱や堪へがたや。愛著戀慕の迷の火炎、縁に引かれて石の火の、身を焦す淺間しや。是迄なり」と駈出る、助「我を捨て何處へぞ、斬しく」と縋れ共、影も形もなき人の、ありとは見へてその原や、伏屋に立る我妻の、位牌に隠れ消えにけり。助「ヤレお龜女共、お龜お龜」と尋れ共、木精計に姿もなし。助「ま一度顔を見せよかし。つれなの人や」とかつぱと伏し、消入々々歎きしが、漸に正氣つき、「ア、うろたへたり南無三寶、思へばお龜は死した者。扱は魂魄止まつて、まざく詞を交せしか、不便の者の心や」と又咽び入る計なり。「エ、口惜や淺ましや、去年一所に死ぬるならば、迷ふとも共に迷ひ、浮むとも共に浮むべし。難面も死に後れ、中有の闇に迷はせし。今出家とはなりたれ共、智識智者の身でもなし、文盲不學の青道心、念佛回向なしたる連、亡者の功德によもならじ。今日は卯月十七日、此の命日の明ぬ間に、今宵の中に自害して、來月のわかはりは、未來で一所に付添はん」と、胸を定めて死を急ぐ。戀しき人は先にあり、此世に残す心

マあゑいーワツ  
コリヤシヨ

今にいかい参り  
今猶懸しき参詣  
者か

うちあけー林し  
くなら

齋非時一厨家に  
て午前の食事を  
齋と云ひ、午後  
のを非時と云ふ  
しゆきん帯一未  
玖

はなく、涙もこぼれぬ死用意、無慙と云ふも愚なり。「ヤア待て暫し、大坂の伯父在所の親、恩深き伯母のあり、狂亂したりと歎きをかけ、不孝の罪も恐ろしや。一筆づよの書置を残さばや」と、佛前の經机引寄せて、油も細き燈火の、消ゆる間近き我命、心あまりて事足らぬ、筆のすさみぞ哀なる。かよる所に相住の道心石山より立歸り、「何と助給御無事なか。今下向致したやあゑい」と、平包どうと下して休みける。助給はつと思ひしが、イヤ此坊主はいろはのいの字も、讀書ならぬ幸と、助、まめで下向羨ましい。今にいかい参りか。在所の文を書きかけた、釜にぬるみも沸いてある、洗足して休息あれ」と、云ひつと筆を早めける。道心何の氣も付かず。道、ヲ、構はずと遊ばせ。扱石山の繁昌京大坂がうちあける。ヤア夫に付戻りがけ、大坂へ立寄り、此方の里へ見廻ふた。在所にも何事なく、長兵衛殿もお息才、立賣堀の伯母御から念比の言傳進上物を渡さふ」と、平包押開き、「來月の十七日はお龜様のむかはり、盛物になされてと是菓子二袋、お齋でもなされふば、と大坂の名物樋の上の切荒布、嵩高な計で錢安な物なねど、是齋にも非時にも重寶な、一分が二ツ届けます。梅雨も近く土用前、喉の疵が發つたら、此藥を参つて随分命延はつて、伯母様の後世菩提頼むとある言傳。是は又白縮緬のしゆきん帯、



堅甲地神—氷の  
朔日に解く

衣の上ころもに能よからふと氣つの付はた伯母御様おはごさま、必かならず疎略そろくになさるよな。幸文さいはひふみの次手ついでなり、皆々たしか慥たしかに届いたたと念比ねんごに遊あそばせ。愚僧ぐそうも一宿いっしやく仕つかり、様々さまさま御馳走ごちそう忝かたじけなくない、と一寸いちゆん入筆いりふで頼たのみます。言傳ことづてどもは明日あした。長道中ながだうちゆうの草臥くたびれ、我等われらは最早もはや休やすみます」と、我事計わがことけい云仕廻いひしまひ、奥おくに入いてぞ臥ふしにける。此間こゝに助給すけたまは書置細々かき置きこまこまと書納かきをりめ、伯母おはごよりの贈物おくりもの一ツひとつに取とつて押戴おせいたきく、位牌ゐはいの前まへにも供養くやうして、暫しばし絶入たんにり歎なげきしが、「扱ありもく難有ありや、益やくにも立たぬ甥なまこ一人ひとり、ある時は氣いきを痛いたませ、心こゝろを盡つくさせ身を碎くだかせ、苦勞くろうの上に苦勞くろうを掛かけ、一日いちにち盡つくせし孝行かうかうなく、不孝ふかう第一だいいちの某それがしを勘當かんたう不興ふかうもし給たまはず、如何いかなる合縁奇縁あひあそびにや、親おやも及およばぬ御厚恩ごこうおん、送おくりも遣やらず自害じがいして、又またもや歎なげきを掛かけん事こと、不孝ふかうの上うへの不孝ふかうの科ごが、日月にちげつの怒いかりを受け、堅けん牢らう地神ぢじんは大地だいちを破やぶり、奈落ならくに沈しづめ給たまふべし、罪業ざいごふ深こき此身體このからだ」と我われと我身わがみを搔抓かきあり、喰く付つきて、聲こゑを上あげて泣居なみたる。やと更渡ふけたる野寺のでらの後夜ごや、八聲やこむの鷄とりも啼交なみかはす。明方あけがたも近付ちかたり、後おくれじものと位牌ゐはいに向むひ、助すけはお龜かめ去年こゝろの五月ごごに伯母御おはごより、緋縮緬ひしゅくめんを下くだされて、御身ごみと我われが肌廻はだまり、自害じがいの恥はを隠かくしたり。時ときしもあれ今夜こゝろ又また白縮緬しろしゅくめんの紵帶ちゆたい、是こゝろも二人ふたりが申受うし、永ながき形見かたみと身に付つけん。我われも受取受取うけとれ」と、位牌ゐはいのひれに結び付むけ、端はしを右手みぎでにしつかと絡からみ、斯持かもちたる心こゝろこそ、最期さいごは後おくれ先立さきだつ共とも、手てに手てを取とつて行道くわうだうは、只ひた一筋すぢの

白縮緬、伸ばさぬ時刻只今」と、髮剃取て押當てしが、「ア、思へばく名残惜の伯母御様、身を達者に長生し、後世弔へとて只今も、お藥迄も下されし志を無下になす御恨み御免あれ。神も佛も御慈悲に、我等を地獄に沈めても、伯母御の二世を助けてたへ、南無阿彌陀佛」と髮剃を、咽にがはと突立て、笛のくさを刎切たり。まだ死兼て目眩く、苦痛はせじと追取直し、人脈筋を四ツ五ツ、聲を掛けて刺通し、うんと計にかつばと伏し、反つ返しつたれを打、苦む中にも妹脊の印、お龜が位牌に抱付、むかはり待たぬ花桶、昔の人と短夜の、雲隠れして世の人の、袂しほるよ藻鹽草、書置に名を三重残しける。

助給書置 下之卷

老木―伯母  
 番―お龜與兵衛  
 聖地云々―昔の  
 丈夫な長持は伯  
 母にかけて今に  
 残り今流行の飯  
 櫃は火に焚かる  
 とて自分等にか  
 けたり

のたれうつ―驚  
 動  
 花桶―五月待つ  
 花桶の香をかげ  
 ば昔の人の袖の  
 香ぞする（伊勢  
 物語）

古道具屋與兵衛入道助給、末期に親伯母の御方へ申残す書置の事。つらく思へば老木返つて春を迎へ、蕾める花の先に散る世のならばし、かたぢの長持嫁に傳はり、出来合はん櫃、風呂の下の霞となる。老少不定の境、會者定離の掟、末世一代教主の如來も、免れがたしと思召せ。それ一河の舟に棹を指し、一樹の蔭の合宿も、他生劫の縁と聞

教主一釋迦

他生劫一前世よりの因縁

跋迷窟一須彌山かけ一懸と賭にかく

湯水も喉に云々一喉に錠がもりて飲み下されぬにかく  
握一視の水

順道一老は先立ち少しは残るが順

鴛鴦の襖一夫婦仲善き事道具屋の縁をとつて屏風障子、疵破といへり  
水入らず一他人

况んや親となり子と生れ、伯母と云はれ甥と成、一日養育の御恩は、蘇迷廬の山より猶高しとこそは承る。況て他年の御面倒、譬を取物なし。殊に去年五月の十七日、不慮の御難義かけ商、命を捨る身の損銀を、他目には榮耀者たはけ者、氣違者と人の譏世の嘲親伯母の御歎き存せぬ我にも候はず。然れども生て居られぬ心の中、今更申せば人を損ふ毀ち家の、立つ方もなき夫婦の者、涙で暮らす朝夕は、湯水も喉に錠前の、懸視の海替干しても、書盡されぬ我身の上、二人が胸に埋れ木の、身にならずして誰人か、推量には及び申まじ。其節お龜諸共に、相果て申程ならば、二度の歎きは掛けまじき。逆も助かる程ならば、存生へ出家成就して、御恩の伯母様情の親、百年の御壽命過ぎ目出度く往生あそばさば、御菩提を弔ひ奉るこそ、順道共孝共申べけれ。去年はお龜が憂を見せ、今年是我等が歎きを掛け、お心を苦め申事、罪に罪を塗長持、孝行の元直に外れ申なり。去ながら子弟主従父子夫婦、五倫の親み何れおろかは無き中に、妻と成夫と成、偕老同穴の枕屏風、鴛鴦の襖障子、疵も破れもなき契、今捨賣にはなりがたし。殊にお龜と我等事、従弟同士の水入らず。鼠入すの竹戸棚、釘も離れぬ中と云ひ、去年最期の折からも、一所と思ふ頼みにて、廿歳に足らぬ女の身、清く相果て候ひしに、我等思はず

卯月の潤色

雜らず

身蓋云々―も  
に離れた自分を  
さす  
無明―煩惱世界

せいげつ―末詳

有路云々―濁  
世より濁土に墜  
る海中の休み

上品下品―九品  
の中  
はかい―行器と  
書く、餅饅頭を

存命し、六道の辻に只一人、今やくと左こそ待兼中にや。現に現れ夢に見へ、幻に  
來り歎く様、見る度毎に片時も、存生て有心、思ひ遣らせ下されとよ。今は此世に亡き  
妻を、二度娑婆に掘出しする、小道具屋の身にもあらず、無常の風の荒道具、身蓋揃は  
ぬ離れ物、浮世の直打更になし。輪廻の塵の置古し、無明の夜市に賣下られんよりは、と  
今宵亡妻の忌日を期して、去年お龜が死したる髮剃、縁と縁とを合せ砥に掛け、廿二歳  
一睡の夢を拂つて、せいげつ己が眉間に施し、今月今日髮剃の、刃に滅し畢んぬ。悲き  
かなや、娑婆に親伯母冥土に妻、未來に情現世に慈悲、中に髮身を挾箱、何時の世にか  
は一對の、一ツ蓮に生るべき。是も因果の車長持、轟く穢土は假の宿、有漏路無漏路の  
中休み、割籠辨當茶辨當、剃ぬ間の戯れなれば、誰か端に残るべき。たとへ此度存生て  
も、重ね箆筒の引出の、一重足らぬ如くにて、お龜なれば甲斐もなし。去年一度に死  
したりと、思召し切り給ひ、歎きも悔みも御留め、只佛壇に指向ひ、夫婦の御回向有に  
於ては、六尺屏風の隔もなく、眞直に受取、先立つ妻の跡繼となり、共に三途のかは葛  
籠、一荷に手を取打渡り、西方淨土に一文字、越ゆるは下品下用櫃、忽ち上品膳棚に到  
らんと、思へば最期急け共、返すくも伯母御様、御名殘惜き椀家具、法界はかいの御

（正文難記）  
じを入る、百

回まが向かう偏ひんに頼たのみ奉ほうる。南無阿彌陀佛彌陀佛と、涙なみだを染そめて書か留りぞむ。切き謠じやう同音 毎まい日にち評ひやう判はん朝ちやう暮ぼの供く

養やう 佛法繁昌の回まが向かうを得えるも、其身の果報くわいはうと承うける。

